

〈研究ノート〉

「体系」という語について

阿久津 智

要 旨

「体系」という語の語誌について、先行研究の成果を踏まえ、各種データベース、コーパス類によって調べた。その結果をまとめると、次のようになる。(1)「体系」という語は、1880年代に system の訳語として生まれ、1890年ごろから学術用語として普及していったが、1910年代には、まだ「新語」として意識されていた。(2)「体系」の語源については、「体」は、「身体」、あるいは、「全体」に由来し、「系」は、「系統」に由来すると思われる。(3)「体系」は、日本語から中国語に入り、中国語では、1910年代ごろから使われるようになった。

キーワード：体系、構造、系統、訳語、新語辞典

1. はじめに

本稿では、「体系」という語について、その語誌を中心に見ていく。

「体系」という語は、言語学では、「構造」と対になる概念を表すものとして、使われることが多い。たとえば、言語学の入門書には、次のような記述が見られる（下線，[] 内は、筆者による。以下同様）。

- (01) 体系 [(system)] とか「構造」(structure) という場合、少なくとも二通りの関係が考えられ、(1) …横の統合関係 (syntagmatic relation) と、(2) …縦の連合関係 (paradigmatic relation)

とがある，ということである。(田中ほか 1975 : 18-19)

- (02) ここでいう「体系」はタテの関係 (paradigmatic), 「構造」はヨコの関係 (syntagmatic) をさす。(風間ほか 2004 : 235)
- (03) 発せられた言葉の連鎖において，そこに現れている要素どうし
の関係は統合関係 (syntagmatic relation), そこに現れている
要素と現れていない要素との関係は連合関係 (paradigmatic
relation) と呼ばれる。…統合関係にある要素は構造 (structure)
をなし，連合関係にある要素どうしは体系 (system) をなす
という。(斎藤 2010 : 17-18)

このような，言語学用語としての「体系」と「構造」は，それぞれ，system, structure の翻訳語と見られる。『言語学大辞典 術語編』(三省堂 1995) の「体系」, 「構造」の項には，それぞれ，「体系の原語 system という語は，元来，『いくつかの部分からなる全体』を意味した語で，…要素と要素との間に一定の関係があつて，それらが積み重なって整合性のある全体をなしているものをいう」, 「原語の structure は，元来，『建物の仕組み，組み立て』を意味した。転じては一般に具体的な物の，さらには抽象的な物の組み立て方をいう」という説明がある。

原語 (英語) における，言語学的な system と structure の使い方 (使い分け) は，1950 年代ごろから見られるようである。『オックスフォード英語辞典』(OED 第 3 版 2015) には，system の言語学における意味 (I. 12. *Linguistics*. A group of terms, units, or categories, in a paradigmatic relationship to one another; frequently opposed to *structure*.) の用例の最初に，1957 年の J. R. Firth の論文が挙げられている。その部分の日本語訳を挙げる (以下の訳では，system は「系列」と訳されている)。

- (04) 音韻論ならびに文法的分析の第 1 の原則は，構造 [*structure*]

と系列〔system〕とを区別することである。…諸系列〔systems〕…は、構造の要素に対して価値を与える、換入する〔commutable〕単元〔〔units〕〕や項〔〔terms〕〕の間の範列的〔〔paradigmatic〕〕関係の一組ないしいくつかの組に限定される。(ファース 1978 : 226-227)

ところで、「構造」は、古くからある漢語であるが、「体系」は、比較的新しい語のようである。

『日本国語大辞典 第二版』(小学館 2000~2002, 以下『日本国語大』), 『大漢和辞典 修訂版』(大修館書店 1984~1986, 以下『大漢和』), 『漢語大詞典』(上海辞書出版社 1986~1994, 以下, 『漢語大』)によると, 「構造」は, 漢籍では, 『後漢書』, 『三国志』, 『宋書』に用例が見られ(『大漢和』, 『漢語大』) {ただし, 『漢語大』や『漢辞海 第四版』(三省堂 2017, 以下『漢辞海』)では, 『後漢書』の例(「構造無端」)を「罪をねつ造する」, 『三国志』の例(「構造反乱」)を「ある種の雰囲気を作り出す」の意味とする}, 和書では, 『古事談』(1212~15 頃)に古い例が見られるが(『日本国語大』), 「体系」は, 古漢籍に用例がなく(『大漢和』, 『漢語大』), 日本の文献では, 明治中期の『改訂増補 哲学字彙』(1884)に, system の訳語の1つとして「体系」が載せられている(『日本国語大』)。

「体系」は, もともと system の翻訳語として生まれた語のようで, 『広辞苑 第七版』(岩波書店 2018), 『角川 新字源 改訂新版』(角川書店 2017), 『漢辞海』, 『明治のことは辞典』(東京堂出版 1986)などで, system の訳語とされている。この語の創造は, 森岡(1991 : 264)の「漢語訳の生産」の方法でいえば, 「造語」に当たるであろう。一方, 「構造」は, もともと, 「種々の材料を用い, 組み立てて作ること」(『日本国語大』)という意味をもつ語として存在しており, structure を「構造」と訳するのは, 森岡(1991 : 249)の「置きかえ」(言いかえ)に当たる。Structure

を「構造」と訳した例は、明治初期から見られる {たとえば、キルレム・ランキイン『蘭均氏土木学 上冊』(文部省 1880:265)に、「構造総論 (On structures in general.)」がある (「国立国会図書館デジタルコレクション」による)}。

以下、本稿では、「体系」という語について見ていく。なお、漢字の字体は、現代日本語の通用字体を用い、「体」、「體」、「躰」は、「体」に統一する。

2. 先行研究

李漢燮『近代漢語研究文献目録』(東京堂出版 2010:187-188)には、「体系」を取り上げた研究文献として、次の3つの文献が挙げられている。

- ① 惣郷正明・飛田良文編『明治のことは辞典』東京堂出版 1986年12月 p.342
- ② 沈国威『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』笠間書院 1994年3月 p.322
- ③ 杉本つとむ「近代訳語を検証する 26 科学 (science)・体系 (system)／コモン・センス・良識 (common sense)」『国文学解釈と鑑賞』70-10 至文堂 2005年10月 pp.225-233

これらの文献に書かれていることをまとめると、おおよそ次のようになる (②の文献については、2017年の改訂新版改装版による)。

- ① 「体系」の概念は、江戸時代の蘭学者にすでに存在した。オランダ語の *stelzel* (現代オランダ語 *stelsel*, 英語 *system* に当たる) を、本木良永は「窮理」と訳し (1792)、高野長英は「系」

と訳している（1832）（杉本 2005：228-229）。

- ⑥ 「体系」は、明治 20（1887）年前後に訳出され、その後、10 年ほどで定着した（杉本 2005：229）。

惣郷・飛田（1986：342）にある、「体系」の初出（辞典）は、明治 17 年刊の『改訂増補 哲学字彙』（1884）である。

- ⑦ 「体系」という語は、「身体」と「系（統）」に由来する。

杉本（2005：229）は、「体系」について、「身体組織の理解、生物の身体における系統、器官の〈系〉を経て成立した訳語といえそうである」と述べている。

- ⑧ 「体系」は、近代以降、日本語から中国語に移入された（沈 2017：328-329）。

沈（2017：329）にある、中国における「体系」の初出（辞典）は、『綜合英漢大辞典』（1928）である。

以上を踏まえ、次節では、上の、⑥（「体系」の訳出と定着）、⑦（「体系」の由来）、⑧（「体系」の中国語への移入）を中心に、「体系」の語誌について見ていく。

3. 文献資料調査

3.1 「体系」の訳出と定着

先にも述べたように、「体系」という語は、system の訳語として、明治中期に造語されたものと見られる。『日本国語大』では、『改訂増補 哲学字彙』（1884）を、「体系」の初出文献とする。これに続き、「体系」は、『和訳字彙』（1888）、『普通術語辞彙』（1905）、『新訳英和辞典』（1909）、『辞林』（1911）、『模範英和辞典』（1911）、『大辞典』（1912）、『新式辞典』（1912）などに現れている（杉本 2005：228-229、惣郷・飛田 1986：342）。

『日本国語大』の「体系」を引用しておく（「ジャパナレッジ」による）。

たい-けい【体系】〔名〕

- (1) 個々別々のものを統一した組織。そのものを構成する各部分を系統的に統一した全体。
 - * 現代経済を考える〔1973〕〈伊東光晴〉Ⅲ・一・一「まず第一に使用する水を循環させる計画を改め、新しい水を取り入れ、これを使用後捨てるという体系にすればよい」
- (2) 一定の原理によって統一的に組織された知識の全体。
 - * 改訂増補哲学字彙〔1884〕「System 系, 統系, 門派, 教法, 制度, 法式, 経紀, 体系, 教系」
 - * 物理学と感覚〔1917〕〈寺田寅彦〉「一層思考の経済上有利な体系が出来得るかどうか」
 - * 竹沢先生と云ふ人〔1924~25〕〈長与善郎〉竹沢先生の散歩・六「一つの哲学と云ひ得る体系を成してゐない」

なお、system の音訳である、外来語の「システム」も、明治中期から使われている。「システム」の『日本国語大』における初出文献は、『物理学術語和英仏独対訳字書』（1888）{国立国会図書館蔵本のタイトルは、『物理学にもちいる語の和英仏独対訳辞書』（BUTSURIGAKU NI MOCHIYURU GO NO WA-EI-FUTSU-DOKU TAIYAKU JISHO）}である。

次に、各種データベース、コーパス類によって、「体系」がいつごろから使われるようになったかを見してみる（最終閲覧は、いずれも 2020 年 10 月）。

「日本語歴史コーパス」（コーパス検索アプリケーション「中納言」を利用）の「検索」（検索文字列＝体系）の結果では、「体系」は、雑誌『太

陽』(1901)に1例現れた。

- (05) 是等に依て見れば、一概にアルコールを慣用するものを以て、研究の標準となすべからざるのみならず、之れが体系上に及ぼす影響に就いては、何等の確証を得ること能はざるべし、之れを反してアルコールを慣用せるものは、抑々其の有害なる成分を飲み下すことあるも、それが為めに必ずしも害毒を蒙ることゝは断じ難きが如し。(『太陽』1901.12:216「世界紀聞」)

「国立国会図書館デジタルコレクション」の「検索」(キーワード=体系)の結果では、「体系」は、1890年代から現れ始める。

- (06) 体系(System)トハ互ニ関係スル種々ノ知識ヲ順序宜ク一体ニ結成スル事ナリ、体系ヲ有スル知識全般ヲ称シテ科学トス、物理学ハ物体運動ニ関スル知識ノ体系ヲ成セル者ニシテ、化学ハ分子配合ニ関スル知識ノ体系ヲ成セル者ナリ、生理学、社会学、心理学、道義学各々知識ヲ体系ニ成ス所アリ、体系ハ必ス原理ノ貫通スルアルヲ以テ定ルモノナリ、故ニ充分ニ之ヲ施行センニハ論理学ト純正哲学トノ関係ヲ察シ純正哲学ノ区域ニ入ラサルヘカラス、(三宅雄二郎編『論理学』文学社1890:114-115)
- (07) 嗚呼予ノ不肖ヲ以テ、世界ノ大勢ヲ通観シ、無慮十二万余言ヲ費シテ、一体系ノ教育哲学史ヲ編述セリ。其ノ微意、古来著明ノ国々ニ流布シタル諸教育ノ錯綜進化シテ、遂ニ今日ノ教育体系アルニ至リタル連絡ヲ論述シ、(松尾貞次郎『教育哲学史』普及舎1893:緒言11)
- (08) 経験的又は物理学的の見方は、経験の材料を与へられたる者と

して受取り、さてそれを細大漏さず研究し秩序立て、排列し、かくして物理学の体系 (System of physics) を造上ぐる者なり。さればその体系は、外的経験及内的経験より生ずる一切の学問即ち科学を包含する者なり。(波多野精一述『哲学概論』東京専門学校出版部 1901 序：2)

新聞のデータベースの「検索」(キーワード=体系)の結果では、『読売新聞』に、明治期における「体系」の用例が 1 例見られた(もとの記事に当たって確認した)。

- (09) 元良〔勇次郎〕博士は多年研究の心理学体系を近刊の哲学雑誌の附録として続載すべしと(『読売新聞』1906.01.03 朝刊「よみうり抄」)

以上から、「体系」は、1890(明治23)年ごろから、学術用語として普及していったと思われる。

大正期に入ると、新語辞典が多数出版されるようになるが、「体系」はこの時期の新語辞典に現れている。1910年代に刊行された新語辞典から、「体系」の解説を挙げる(「国立国会図書館デジタルコレクション」による)。

- (10) タイケイ〔体系=System〕 個々別々のものを統一せる組織。系統。(大畑匡山・西村醉夢『現代文芸新語辞典』東条書店 1914：215)
- (11) 体系(名) 個々別々のものを統一した組織。(小山内薫編『文芸新語辞典』春陽堂 1918：89)
- (12) 体系(System) 個々別々のものを統一して組立てること。系

統、組織など同意義に用ふる。〔下中芳岳『ポケット顧問 や、此は便利だ 増補改版 第二版』平凡社 1919：243（初版 1914）〕

- (13) 【タイケイ】 体系。系統といふ語に一層具体的意味を加へたる語なり。（上田景二編『模範新語通語大辞典』松本商会出版部 1919：193）
- (14) 【体系】（System） 個々別々のものを統一して組織せるものなり（竹内猷郎編『袖珍新聞語辞典』東京堂 1919：122）

これらから、「体系」は、大正期には「新語」として意識されていたことがうかがえる。なお、これらの辞典における「新語」は、（『文芸新語』とある 10・11 を含め）「平均的な社会生活を送るために必要な教養としての新語」=「新聞語」（木村 2010：9）と思われる。

3.2 「体系」の由来

杉本（2005：229）は、「体系」について、「身体組織の理解、生物の身体における系統、器官の〈系〉を経て成立した訳語といえそうである」と述べており、「体系」を、「身体」の「体」と「系統」の「系」とから造られた語だと見ているようである。〔「系統」は、『日本国語大』によれば、『日本外史』（1827）に用例がある。また、『漢語大』や『漢辞海』によれば、漢籍では、南宋の范成大の詩に「系統」が見られる。ただし、これらは、いずれも「血統」の意味である〕。

しかし、今日、医学分野では、system は、「体系」より、むしろ、「系」、あるいは、「系統」と訳されているようである。「ジャパンナレッジ」所収の専門英和辞典の system の項には、「【生物学】系（統）、器官、組織、器官」（『医学英和辞典 第2版』研究社 2008）、「《生理》（身体器官などの）系統、系」（『SPED 理工系英和辞典』小学館 2004）などがある。〔生物統計学・生物体系学を専門とする三中信宏は、「私が見るかぎり、分類

や系統に比べると体系が使われる頻度は各段に低いようです。…体系ということばは私たち日本人には受け入れにくい心理的な敷居の高さがあるのだと推測されます」と述べている（三中 2017：237）。

これは、明治期においても、同様であったようで、「国立国会図書館デジタルコレクション」の「検索」（キーワード＝体系 OR 系統 OR 系、NDC 分類＝4 類 自然科学）の結果では、明治期の文献に、「体系」は現れず、「系」と「系統」のみが現れた。たとえば、田口和美編『解剖攬要 13 下』（英蘭堂 1882：56）、奈良坂源一郎『解剖大全 三卷』（名古屋新聞社 1884：1）などでは、ラテン語の *systema* が「系統」と訳され、今田東・石川清忠訳『賢列氏解剖学 卷三』（島村利助・丸屋善七 1887：197）、奈良坂源一郎『簡明組織学 四卷』（奈良坂源一郎 1888：27）などでは、ドイツ語の *System* が「系統」と訳され、長谷川泰編訳『内科要略 卷八』（島村利助・丸屋善七 1884：1）などでは、ドイツ語の *System* が「系」と訳され、鳥谷部政人訳『内科新論 下』（島村利助ほか 1887：354）などでは、英語の *system* が「系」と訳されている。

一方で、雑誌『太陽』（1901）に現れた「体系」の例（05）は、アルコールの人体への影響に関する記事であり、この記事において、「体系」は、「身体系（統）」を表しているように思われる。このような例は、ほかに見つからなかったもので、確かなことはいえないが、あるいは、「体系」に、このような用法があったのかもしれない。

「体系」の語源に関しては、ほかに、増井金典『日本語源広辞典 増補版』（ミネルヴァ書房 2012）に、「体（全体）＋系（系統）」とあり、ここでは、「体系」の「体」を、「身体」ではなく、「全体」と見ている。明治期の辞典では、1905 年刊の『普通術語辞彙』に、次のようにある。

- (15) 体系と謂ふのは、各部分が方法的に結合せられたる一全体を謂ふ、詳言すれば、一全体を組織する成素が、秩序整然と排列

し、其の各成素間には、規則正しき聯絡が保たれてゐることを謂ふ、…其の部分と全体とが聯絡統一を保つ一個の全体に統括したるものを謂ふのである。(徳谷豊之助・松尾勇四郎『普通術語辞彙』敬文社 1905 : 162-163)

この辞書では、「体系」の「全体」性が強調されている。あるいは、「体系」の「体」は、「全体」(あるいは、「一全体」、「一体」)に由来するとも考えられる。

3.3 「体系」の中国への移入

「体系」という語は、現代中国語でも使われるが、これは、日本から伝わったものようである。沈 (2017) には、「新しい語彙項目として近代以降、日本語から導入されたものであることが判明した」(沈 2017 : 277) 語の1つとして、「体系」が挙げられている。沈 (2017 : 329) に掲げられている、「体系」の現れる、最も古い中国の辞典は、1928年刊の『綜合英漢大辞典』である。なお、中国語の最大規模の辞典である『漢語大』の「体系」には、現代文学 [魏巍『東方』(1978), 秦牧『芸海拾貝』(1962)] の用例しか挙げられていない。

以下、各種データベースによって、「体系」がいつごろから使われるようになったかを見してみる(最終閲覧は、いずれも2020年10月)。

古典籍については、「中国哲学書電子化計画」(「先秦兩漢」・「漢代之後」)、「漢籍電子文献資料庫」で検索(全文検索)した結果、「体系」は現れなかった。

「英華字典」の「搜尋」(全文)の結果では、1916年刊のヘメリング(Hemeling, Karl Ernst Georg, 赫美玲)『官話』(*English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language*)に、「Systematology, *n.*, 体系論 *t'i hsi lun.*」が現れた。ただし、同辞典のSystemには、「体系」は挙

げられていない |なお, Systematology は, イーストレーキ・棚橋一郎訳『ウェブスター氏新刊大辞書 和訳字彙』(三省堂 1888)の見出し語にあるが, そこには「法式論, 体裁論, 組織論」とあり, 「体系論」はない(同辞典の System には, 「体系」が見える)}。

「東方雑誌 全文数拠庫」の検索(全文)の結果では, 「体系」は, 『東方雑誌』(1904年創刊)に, 1910年代から現れている(もとの記事に当たって確認した)([]内は筆者による読み下し)。

- (16) 祇須其構造体系属金類。則此機亦可以轟毀之。[祇須其の構造体系の金類に属するのみにして, 則ち此の機(F-rays)亦た以て之を轟毀すべし。] (『東方雑誌』10-7 1913:4-9 甘作霖「世界最猛之軍用殺人術」)(ただし, 原文は「體係」。ここでは, 「係」=「系」ととった)
- (17) 阿斯瓦爾特者科学家也。故其世界觀。人生觀。皆準乎能力定律。第一律曰。能力不減。体系雖遷。全量不變。[阿斯瓦爾特(Ostwald)は科学家なり。故に其の世界觀, 人生觀は, 皆能力に準つて律を定む。第一律に曰く, 能力は減せず, 体系遷るといへども, 全量は変わらずと。] (『東方雑誌』14-7 1917:105 高无鈍「科学上之大人物」)
- (18) 由如是混乱矛盾中教育而来之欧洲人。於出学校之後。更從各処聽受哲学体系上之断片。(『東方雑誌』15-6 1918:84 平伏「中西文明之評判: 訳日本雑誌『東亞之光』」){原文は, 「斯かる混乱と矛盾の中に教育されたる教育ある欧洲人は, 其上に尚其処此処にて, 哲学体系の断片を聴き噬じる。」(『東亞之光』13-2 1918:24 天津泰「支那精神と欧洲精神」)}

以上から, 「体系」は, 中国語では, 1910年代ごろから使われるように

なったのではないかと思われる。

4. おわりに

以上、「体系」について見てきた。それをまとめると、次のようになる。

- (1) 「体系」という語は、1880年代に system の訳語として生まれ、1890年ごろから学術用語として普及していったが、1910年代には、まだ「新語」として意識されていた。
- (2) 「体系」の語源については、「体」は、「身体」、あるいは、「全体」に由来し、「系」は、「系統」に由来すると思われる。
- (3) 「体系」は、日本語から中国語に入り、中国語では、1910年代ごろから使われるようになった。

【参考文献】

- 李漢燮 (2010) 『近代漢語研究文献目録』東京堂出版
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 (2004) 『言語学 第2版』東京大学出版会
- 木村義之 (2010) 「新語辞典の形成と展開」『日本語と日本語教育』38 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター pp.1-26
- 斎藤純男 (2010) 『言語学入門』三省堂
- 沈国威 (2017) 『近代日中語彙交流史：新漢語の生成と受容 改訂新版改装版』笠間書院 (初版1994, 改訂新版2008)
- 杉本つとむ (2005) 「近代訳語を検証する 26：科学 (science)・体系 (system) / コモン・センス・良識 (common sense)」『国文学 解釈と鑑賞』70-10 至文堂 pp.225-233
- 惣郷正明・飛田良文編 (1986) 『明治のことは辞典』東京堂出版
- 田中春美・家村睦夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・樋口時弘 (1975) 『言語学入門』大修館書店
- ファース, J.R., 大東百合子訳 (1978) 「言語学理論 (1930-55) の概要」『ファー

- ス言語論集Ⅱ：1952-59』研究社出版（原著初出 1957）pp. 205-250
三中信宏（2017）『思考の体系学：分類と系統から見たダイアグラム論』春秋社
森岡健二（1991）「漢語訳出の方法」『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院（初出 1959）pp. 246-271

【使用データベース類】（いずれも最終閲覧は、2020年10月）

- 「朝日新聞記事データベース」（聞蔵Ⅱビジュアル）朝日新聞社
<https://database.asahi.com/index.shtml>
「英華字典」中央研究院近代史研究所
<http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/>
「漢籍電子文献資料庫」中央研究院歷史語言研究所
<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw>
「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館
<http://dl.ndl.go.jp>
「ジャパンナレッジ」ジャパンナレッジ
<http://japanknowledge.com>
「中国哲学書電子化計画」中国哲学書電子化計画
cext.org/zh
「東方雑誌 全文数拠庫」商務印書館
<http://cpem.cp.com.cn/Search>
「日本語歴史コーパス」（中納言 2.5.2 データバージョン 2020.03）国立国語研究所
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/
「毎索」毎日新聞社
<https://mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>
「ヨミダス歴史館」読売新聞社
<https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/>

（原稿受付 2020年10月27日）